児童健全育成賞（數納賞）佳　作

過去を整理し、現在に足をつけ、未来へ進むための生い立ちの整理

愛知県名古屋市
児童養護施設ゆうりん　主任心理士　藤　嵜　真　士

はじめに

厚生労働省の調査によると、平成28年度には、児童虐待に関する相談件数が過去最多の12万件を越えた。調査を開始した平成２年度から26年連続で増加し続けている。これには、世間に児童虐待に対する意識が高まり全体の通報が増えたことと、子どもの前で配偶者間の暴力が行われる面前DV（心理的虐待）による警察からの通報が増えた事が一つの理由とされる。このように児童虐待に関する相談が増加する中で、全国の児童養護施設で約２万８千人が親と離れて生活をしている。

施設で生活をしている子どもの中には、施設に来る前の生活について憶えていない子どもや、過去の生活を語ることが出来ない子どもがいる。大変な環境で過ごしてきた子どもたちは、その日一日を生き延びるために全力を使い、前の日にあったことを思い出す暇や、将来について考える暇などない、今だけを考える生活を送ってきている。そんな子どもに「将来何になりたいの？」と聞くと、「そんな事考えたことない。」との答えが返ってくる。「施設にくる前はどんな生活してたの？」と聞けば、「憶えてない。」「別に」と言って、他の話題に切り替えようとする。

一昔前までは、過酷な過去を話させるのではなく、忘れさせるほうがいいのではないかと言われていた。過去を振り返る事無く、未来を想像させようとしたのである。しかし、そのように過去を整理せずに大きくなった子どもが思春期になると、必ずと言っていいほど大きく混乱するのである。

そのような思春期の混乱を目の当たりにしていく中で、子どもの生い立ちの整理の重要性を認識するようになった。一般的には、生い立ちの整理とは、誕生から成人するまでの成長の歴史を整理することである。

しかし、施設における生い立ちの整理は、成長の歴史を整理することを通して、子どもの過去―現在―未来をつなぎ、前向きに生きていけるようになることを目的とした取り組みである。自分はどうやって育ってきたのか、なぜ今施設で生活しているのか、今後どのようになっていくのかを信頼できる職員と共に考えていけるように様々な取り組みを行っていく。一つの方法があるのではなく、それぞれの子どもにあった方法を模索し、カスタマイズしてやっていく事が重要である。今回は、私が所属する児童養護施設ゆうりん（以下ゆうりん）で行っている、生い立ちの整理の取り組みについて報告をさせていただく。

中央有鄰学院の歴史

本法人は、明治33年に設立され約115年の歴史がある。現在の社会福祉法人中央有鄰学院が

認可されたのが昭和27年になる。その後、平成22年３月に全面改築を行い、児童養護施設に乳児院が附設された。児童養護施設は定員45名、乳児院は定員15名。それぞれ、児童養護施設が６つの小舎、乳児院が４つのユニットに分かれている。少人数でのケアを大切にし、職員と子どもの関係性と愛着形成を重視した養育を行っている。また、平成24年４月に自立援助ホーム、平成29年４月に地域小規模児童養護施設の開設をおこなった。

入所児童が抱える課題と生い立ちの整理

１）入所理由の誤認識

児童養護施設に入所する子どもの多くは、自分が施設に来た理由を知らないことが多い。そのため、自分で入所理由を考え始めるのである。もともと子どもは、悪いことの原因を自分に求めようとする傾向があるうえに、虐待環境に置かれていた子どもは、日々暴言を浴びせられていたり、自分に大人が興味を示さなかったりすることで、自分には価値が無いと誤ったレッテルを貼ってしまう。そんな子どもに施設に来た理由を聞くと、「自分が悪いから。」、「自分が良い子にしていればよかった。」と自分を責める発言ばかりが出てくる。実際の入所の理由は、『両親の不和（面前DV）』、『親から子への虐待』、『経済的理由』など、子どもが責任を感じる必要のない理由であるにも関わらず、多くの子どもは入所の理由を自分にあると感じて施設に入ってくる。

このような入所理由の誤認識は、子どもの自尊感情を低下させ、将来への希望を持つことを妨げる。自分に価値が無いと思っている子どもが将来に希望を持つことが難しいのは当然である。

入所後に、入所以前の生活を整理しながら入所に至った経緯を丁寧に教えていくことで、自分は悪くなかったんだと正しい認識が出来るようになっていく事は子どもにとって大きな意味がある。あくまでも施設に入所したのは大人の責任であること、一方でたくさんの大人が子どもの事を助けたくて施設入所を選択したことを伝えなければならない。この入所理由の整理も生い立ちの整理の中で扱っていく重要な課題の１つである。

２）成長の語り手の喪失

児童養護施設で暮らす子どもは必ず、入所時に主たる養育者との別れを経験することになる。家庭からくる場合は親と、乳児院から来る場合は乳児院の職員との別れである。この別れの体験により、人生の連続性が失われる。多くの家庭では、転勤等で住む場所が変わることはあっても、主たる養育者が変わる事はそれほど多くない。育った環境と主たる養育者が変わることで、それまでの人生と、これからの人生がぶつ切りになってしまう。

例えば、思い出を共有しているはずの養育者がいなくなることで、「昔は良く泣いていたのに、今は泣かなくなったね。」、「わがままばっかり言っていた子が、今はもうお兄ちゃんだね。」等の当たり前であるはずの過去から現在にいたる子どもの成長を話せる大人がいなくなるのである。子どもの成長の過程を語る事は、子どもがいかに大切に育てられてきたかを語ることと繋がる。その話を聞くことで、子どもは自分がいかに大切にされていたかを知り、自分を大切に出来るようになっていく。逆に成長を語ってくれる大人がいない子どもは、自分は大切にされていたのかに疑問を持ち始める。施設入所後は、その語り手に職員がなるだけではなく、施設入所前の人生をどのようにすれば子どもと一緒に共有できるのかを試行錯誤していく事が重要になってくる。

３）思春期の混乱

子どもの生い立ちが整理できていないことによる問題が大きく表面化するのは思春期である。思春期に入ると、多くの子どもが身体的にも心理的にも大人になっていく。性的に大きく成長することで、自分の生について興味を持つ事は自然な流れである。特に他の子どもと自分の生い立ちが違うと感じている施設児童にとっては、

性の発達はそのまま自分の生い立ちを考えることに繋がるのである。自分の生い立ちを知らない子どもは、根っこのない木と同じでぐらつきやすい。思春期に起こる身体的、心理的大きな変化に対しても同様にぐらつきやすく、特に自分とは何かを考え始めたときに大きなゆさぶりを受けてしまう。その反動として、不登校や暴力、自傷等の問題行動として、その混乱が行動として表出されるのである。

もちろん、思春期以降に生い立ちの整理が不可能なわけではなく、むしろ成長に合わせた形で整理を進めることはできる。ただ、思春期以前から、少しづつ過去の整理を行う方が子どもへの負担は軽いと考える。

過酷な過去を振り返り、自分の中に収めていく作業には時間とエネルギーが必要である。子どもにとって生い立ちを整理する事は簡単なことではない。時には思い出したくない過去を思いだし、自分史の一部として整理していかなければならないのである。そのためには、過去を話せる信頼できる大人が近くにいる必要がある。一人では抱える事ができないものを、一緒に抱えてくれる大人無しでは生い立ちの整理は進まない。思春期までにどのように生い立ちの整理を進めていけば良いのかが、児童養護施設にとって大きな課題の一つと言える。

生い立ちの整理の実践

ア）関係性を育む

子どもはたくさんの厳しい過去を背負って施設にやってくる。大人から見て、知らないほうが良いのではないかと思う過去もたくさんある。ただ、子どもが知りたいと思うことについては、できる限り事実を伝える事が生い立ちの整理には必要だと感じている。

その中で、施設の職員が出来る事は、一人で向き合うには厳しすぎる過去にどうすれば圧倒されずに心に納めることができるのかを考え、倒れそうになる子どもを側で支えてあげることではないかと考える。大変なことに向き合うためには、その事実を一緒に背負ってくれる人が必要である。ただし、当然その大人は誰でも良いわけではない。子どもが信頼し、この人なら安心できると思った相手でなければならない。

ゆうりんでは、子どもと職員の関係性と愛着を重視した養育を目指し、個別の担当制を採用している。担当職員は養育目標を作成するだけではなく、参観や懇談会にも出席する。また、子どもと１対１での個別外出を積極的に取り入れている。

個別外出とは、担当職員と子どもがどこに行き何をするのかを自由に話し合い、２人きりの時間を大切にする支援の1つである。部屋には、複数の児童が共に生活をしているため、大人と１対１で関わる時間を作る事がとても難しい。みんなの前では話しにくいことや、聞きにくいことでも職員と１対１の時には話すことが出来る。このときに家族の話や家での生活の話が出る事が多々ある。個別外出によって、子ども自身も自分の担当職員を意識することになる。多くの子どもが、大人の意思で決められた人生を送ってきた中で、自分の希望を叶えてくれる個別外出は、単なる楽しい思い出作り以上に自分が大切にされていると感じられる重要な体験である。

ただ、子どもによっては、初めての個別外出にとても大きな不安を示す子どもがいる。ある子どもは、前日までニコニコしながら「明日は〇〇に行くんだよ。ご飯はね…」とわざとらしいくらい大きな声で話し、誰から見ても楽しみにしていたのに、いざ出発直前になると駄々をこねて、「行きたくない。」、「嫌い。」、「他の職員が良い。」と不安を様々な言葉と行動で示してくる。

不適切な養育環境で育った子どもの中には、幸せな体験であるはずのことが、逆に不安を高める引き金になってしまう点にも注意が必要である。子どもの心の中にある幸せの器が育っていないため、幸せな事も許容範囲を超えると不適応行動を引き起こす要因になりうるのである。これは、過去の体験から、幸せな事は長続きしないと信じている子どもや、あるいは幸せなこ

とのあとには必ず嫌なことが待っていると思っているところからきているのだろう。もちろん、すべての子どもがこれらの事を意識しているわけではなく、無意識の中で漠然とした不安に襲われている事のほうが多い。

また、職員がどこまで自分を見捨てないかを計ろうと試していることもよくある。子どもは、大切な人ほどどこまで自分と一緒にいてくれるのか、許してくれるのかを確認しようとする。これも、親から見捨てられたと考えている子どもや被虐待経験がある子どもによく見られる特徴である。これ以上大切な人を失いたくない思いがとても強いのである。

そんな様々な形で出される子どもの甘えに出来る限り応える事ができるように個別の時間を大切にしているのである。ただ何でも許容してしまうのではなく、ダメな事はダメと言いながらも子どもが見守られているという感覚をもてるような関係をどのように育んでいくのかは、簡単なことではない。外出の時に駄々をこねる子どもに、「大丈夫だよ。時間はあるから、気持ちが落ち着くまで待つよ。」と声をかけ、『この子の中で今なにが起こっているのだろうか？』ということに思いを馳せる必要がある。四六時中一緒にいる事が大切なのではなく、子どもからのヘルプのサインを見逃さず、困っている時に声をかられるのかが重要である。そういったことを日々の生活の中で意識しながら子どもと接していくうちに、子どもが職員を信頼し、必要と感じることができるようになってくる。これが、生い立ちの整理のスタート地点だと考える。

イ）誕生学

誕生学は平成27年から始めた取り組みである。外部の講師（助産師、医師）に依頼をして、様々なワークや講義を行ってもらう（表１）。その目的は、命の尊さを学ぶことと、自分がここにいる事は当たり前のことではなく、生きる力を持って生まれてきたことを学び、自分の誕生を肯定的に捉えられるようになることである。

ある高校生は感想に『自分の誕生について考えたこともなくて、母親に聞いた事もないので、誕生学も自分にとって良い勉強になったと思います。生まされたと言うより、自分の力で産れたんだと始めて知りました。』と書き、ある中学生は『赤ちゃんを産む母親はすごく痛そうで、

表 1

平成27年度

グループ	参加人数	内容	
年少児・年中児	8名	米・針の穴の光を見て実際の大きさを感じる。 職員に抱っこされ居心地の良さを感じる。	ワーク
年長児・小学1年生	8名		
小学2、3年生	7名	赤ちゃんがおなかの中で誕生して～出生まで。 赤ちゃんのおなかの中での過ごし方。 「（あなた）の未来をみたい」という想いで今ここにいること 死産・流産・中絶の数⇒産れてこなかった命について。 （中高生のみ）	講義
小学4,5,6年生	7名		
中高生	13名		

平成28年度

グループ	参加人数	内容	
年少児・年中児	7名	3キロの米袋抱っこ。	ワーク
年長児・小学1年生	8名		
小学2、3年生	7名		
小学4,5,6年生	7名	おなかの中で命が誕生した時の大きさから大きくなる過程。 赤ちゃんも産れようとがんばっている。 母親が産むという選択をしたこと。 抱っこしないと生きられない。 出産のDVD（中高生のみ）	講義
中高生（女子）	9名		
中高生（男子）	6名		

平成29年度

グループ	参加人数	内容	
幼児	7名	聴診器で心臓の音を聞く。 胎児人形を抱っこ。 自分の出生時の身長体重を聞こう。	ワーク
小学1,2年生	8名		
小学3,4,5,6年生（女子） 小学3年生（男子）	6名		
小学4、5,6年生（男子）	5名	おなかの中で命が誕生した時の大きさから、大きくなる過程。 おなかの中で赤ちゃんがどのように暮らしているのか。 生まれてくるときの様子。	講義
中学生 （高校生は自由参加）	8名		

すごく唸っているのを見て、私も赤ちゃんを産むのは嫌だなと思いました。』と書いた。この中学生はその後部屋に戻り、担当職員と自分が生まれた時に母親もすごく大変な思いをしたことを話している。また、別の中学生は「赤ちゃんはおなかの中でハグされてる感じなんでしょ。ハグして。」と担当職員にハグを求め、ハグされると嬉しそうにしていた。このように、誕生学はその場で子どもが学ぶだけではなく、各部屋に戻った後に子どもが自分の生い立ちを語る事が多いため、それを職員がどのように受け止めるのかがとても重要である。

平成29年度の誕生学では、母子手帳を持参するかどうかを検討した。結果的には、たくさんの記述がある子どもと全くの白紙の子どもがいた為、母子手帳の導入は断念した。その代わりに子どもの出生時の身長や体重を誕生学までに子どもに伝え、その上で参加させることにした。自分が生まれた時の体重と身長が分かった上で誕生学を聞いたことで、より自分に置きかえて考える事ができていた。誕生学はまさに生い立ちの始まりであることから、これから生い立ちの整理をしていこうとするきっかけ作りとして、重要な役割を担っている。

ウ）赤ちゃん体験

本施設は、元々乳児院から児童養護施設への措置変更に伴う見捨てられ体験を出来るだけ軽減できないかと考え、児童養護施設に乳児院を附設させた経緯がある。現在、児童養護施設入所児童42名中、14名が乳児院から移行してきた子どもである。

乳児院から移行してきた子どもは、いつでも小さかったころに育ててもらった大人に会いにいき、育った場所を見ることが出来る。子どもが希望をすれば、乳児院へ遊びに行く事もできるようにしている。これにより、自分の育った環境を大きくなってから振り返ることが容易になり、過去と現在をつなぐことが可能になってきている。この恵まれた施設環境を活かした活動の一つが『赤ちゃん体験』である。

赤ちゃん体験とは、児童養護施設の子どもが担当職員と一緒に乳児院に行き、乳児院の職員が赤ちゃんに関わる姿を見たり、子どもによっては、実際に赤ちゃんにミルクを上げたり、沐浴させたり直接関わる体験をさせる活動である。実際に赤ちゃんに関わることで、過去の自分に思いを馳せることができる。もちろん乳児院から児童養護にきた子どもに関しては、乳児院の時にお世話をしてもらった職員から、昔の自分の姿を教えてもらう事が生い立ちの整理になる。平成28年度は５名（小学生２名、中学生３名）が実施。平成29年度は６名（小学生５名、高校生１名）の赤ちゃん体験をおこなった。

赤ちゃんは自分の気持ちを言葉で伝える事ができないため、大人が気持ちを代弁して快、不快を伝えてあげる事が大切だと乳児院職員から教えてもらった。上手に声をかけられる子どももいたが、中には声をかけられなかったり、名前すら呼びかけることができない子どもがおり、自信のなさや子ども自身が満たされてこなかったことからくる戸惑いが感じられた。逆にきょうだいがいる子どもは、親が世話を出来ないときに親代わりをしており、とても上手にミルクやオムツ替えが出来ているのが印象的だった。

実際に赤ちゃんがケアされている様子を見たり、自分でお世話する事で赤ちゃんは一人では何も出来ず、大人が手助けをしないといけない存在であることを知り、「自分が赤ちゃんの時にもお世話をしてくれた大人がいたのかなと」想像を膨らます体験となった。

実際に体験後にある中学生は、「家でもミルクやったことあるから。ママ家にいなかったし。」と母親がネグレクト状態で、自分が母親代わりをしていた事を話した。また、ある小学生は、「こんなにちっちゃいんだね。」と話し、部屋に戻るなり自分が大切にされてきたことを再確認するように、職員に抱っこやおおんぶを求め、「赤ちゃんを抱っこするみたいにして。やさしくしてよ。」と甘えが出るようになった。

赤ちゃん体験は、生い立ちの整理のきっかけ作りとしてだけでなく、赤ちゃん体験そのものが生い立ちの整理になる活動である。子どもに

よっては、辛い過去を思い出してしまうことや、自分がしてもらわなかったことを目の前で見せられる事が辛い体験になるかもしれない。それでも、そのことを一人で抱えるのではなく、一緒に赤ちゃん体験をした担当職員と共有することが最も大切である。辛いことから目を背けるのでなく、向き合い整理をするために、担当職員と共に赤ちゃん体験をする事に意味がある。

エ）アルバム作り

生い立ちの整理は、施設に入る前の整理だけではなく、施設入所後にどのような体験をしてきたのかを整理する事でもある。児童養護施設に３歳から入所した子どもは、最大で15～16年間は施設で生活することになる。

アルバム作りというと、一般的な家庭においては当たり前の事である。しかし、施設においてはなかなか一人ひとりのアルバムを丁寧に作ることが出来ていないのが現状である。ゆうりんでは、子ども一人ひとりにアルバムを作る事の大切さを職員間で共有し、誕生日や、キャンプ、外出などのイベント時に写真を撮るだけでなく、何気ない日常の入浴、公園に遊びに行くといった場面を写真に残し、アルバムにつづることを行っている。もちろん、アルバムを作るのは子どもの担当職員の重要な仕事の１つとなっている。子ども自身も、自分のアルバムがある事は知っており、時折、「アルバム出して。」と言っては、職員と一緒にアルバムを眺めながら過去の思い出を楽しそうに振り返ることが出来ている。

アルバム作成時の留意点として、

- 「その子らしさ」を意識する。
- その子なりの気持ちや感情が分かる写真が大切。
- 職員や関わっている大人と一緒に写っている写真。
- 特別なときの写真だけでなく、何気ない日常の写真を入れる。

という４点を特に大切にしてアルバム作りを行っている。その時の気持ちや情景が思い出せるように、一つひとつの写真の横には担当職員のコメントが必ず入っている。ここでも、担当職員との繋がりが重要になってくる。ある小学生の担当職員は産休でしばらく来れなくなった。新しい担当職員が引継ぎをおこない日々の生活は問題なく過ぎていった。

しかし、アルバムに写真をはさんでいる時にこの子どもは、アルバムのコメントは産休中の元担当職員に書いて欲しいと相談してきた。当然元担当職員は写真の場面を知らない。そこで、子どもが元担当職員にその場面を教えながらコメントを書いて貰う事を子どもに提案し、子どももそれを受け入れた。このアルバムを通した作業は、共に時間を過ごすことができなくても、子どもの生い立ちを共有することができるとても大切な体験となった。また、改めて大人との関係性の大切さを感じた。

オ）事例

生い立ちの整理は、子どもの希望に沿って行っていく。時には、ストレートに子どもが自分の生い立ちを知りたいと職員に相談して始まる。またある時は、食卓で子どもが話す何気ない会話の中に潜む、生い立ちが気になっている気持ちを職員が察知して始めることもある。どのようにしていけば、子どもが過去を整理して、将来へ希望を持つことが出来るようになるかを考えて、様々な方法を子どもに合わせた形でカスタマイズしていく。その過程を通して、大人への信頼感を取り戻し、過去と現在が繋がり、未来への希望を持てるようになる事が重要である。個別に行った生い立ちの整理の事例を１つ報告させていただく。

【事例　Ａちゃんの生い立ちマップ】

彼女の両親は離婚し、離婚後に母親一人の力で育てていくことが難しいとの理由で施設入所となった。当初は、仕事が落ち着き住む場所が決まるまでの短期入所の予定であったが、長期化している。母親との外泊や面会は定期的に行われており、徐々に家族を客観的に見れるようになってきた。しかし、なぜ施設に入所したのかや、今父親はどうしているのかなどの疑問は解決されないままの状態であった。

そんなある時、担当職員に昔住んでいた場所に行きたいと話してきた。過去に住んでいた場所に行きたいとAちゃん自身が言ったため、これは生い立ちの整理を始めるタイミングだと考え、担当職員とAちゃんとで話し合いを繰り返し、入所前に住んでいた町を一緒に歩きながら、写真に納めたり、地図を作成したりして、生い立ちマップを作ることにした。

Aちゃんの記憶を頼りに、昔住んでいた町を担当職員と一緒に散策した。小さい時に遊んでいた公園では、ワニの遊具を見て「よくこうやって歯磨きごっこしていたんだよ。」と懐かしそうに歯を磨くまねをしていた。昔住んでいた家にいったときには「なつかしー、お家はこっちだよ。」と担当職員を案内してくれた。「家では兄弟の世話をしていて大変だったよ。ママはいない時が多くてね。」とのエピソードも語られた。また、近くの中華料理屋の臭いが懐かしいと、その時の記憶が五感を通して思い出されることに職員も驚いた。

また、「パパが１人ずつのお部屋を作ってくれて、仕事が休みの日はどっか連れて行ってくれて楽しかった。けど、ストレスが溜まって、暴力ふるって離婚したけど、今でも自分たちのこと知ってると思う。」と施設では語ることのないことを語る事ができた。また職員と一緒にこのマップを作った事も、「暑い夏の日の思い出巡り、途中でアイス食べたり、懐かしいところ歩いたり、まだまだ続くよ。」と本児が書いていた。この生い立ちマップ作りが本児の生い立ちの整理になるだけでなく、将来は生い立ちの一部になることを強く感じた。現在彼女は、家庭復帰ではなく、施設から自立することを自分で決めて、将来の夢に向けて頑張っている最中である。

まとめ

自分の過去を整理する事は、そのまま将来の自分へと続く道を整理する過程でもある。自分が何者であるのかを分からずに将来に夢を持つことが困難な事は、多くの子どもを送り出した経験から感じている。

ゆうりんでは、家族の話をする事をタブー視していた時期もあった。家族が分からない子どもに家族の話題をするのは酷ではないかというのがその理由のひとつであった。

しかし、家族が見えない子どもでも、実際は家族の事を考え続けているのである。心のうちに悩みや疑問を抱え続けるだけでは、その不安や不満は、他児への暴力や、職員への反抗といった形で現れる。そうではなく、言葉で語り、大人と共有する事が必要である。どんな親なのか、どこで生まれたのか、どのように育ってきたのか、分からないなりに自分の生い立ちについて、自分の言葉で感じていることを語り整理をしていく必要がある。生い立ちの整理は、過去の記憶や事実の正確さを求めるものではなく、自分の成長してきた過程をどのように子どもが捉えているのかを整理していく作業である。そのために、『誕生学』、『赤ちゃん体験』、『生い立ちマップ』、『アルバム作り』等、様々な方法を考えて実践してきた。

ただ、実際の生い立ちの整理のきっかけは、何気ない日常の中に現れるものである。ある日の夕食で、A君「俺ん家は、厳しかった。なんかするとずっと正座させられたりして。」、職員「ずっと正座はきついね。」、B君「俺はそういうのはなかったけど、預けられていたとこの園長先生が他の先生殴って血がでとった。」、職員「園長先生が他の先生殴るとこみたの？私が見たら怖い気持ちになるな。」C君「そんなことあんの。おれはないな。」と、一人が過酷な過去を語り、職員はその話を遮ることなく、受け止める。受け止めることで、他児も話していいんだと思い、自分の過去を話し始める。もちろん、ケアワーカーがある程度話の流れをコントロールしなければ、単なる不幸自慢のような流れになってしまい、過去の整理ではなく、傷つき体験になってしまう。

このように、生い立ちの整理のために特別な方法を用いるだけではなく、日々の生活の中で子どもから出される様々な信号をいかに逃さず

に拾う事が出来るかが一番重要である。

まだ、生い立ちの整理の取り組みは始まったばかりである。平成29年８月に厚生労働省から『新しい社会的養育ビジョン』が発表され、施設養護から里親養護への大きな転換期を迎えようとしている。今後、里親養育や養子縁組のような支援へと変わっていく中でも、生い立ちの整理の重要性は変わらないと考える。ただし、それぞれの養育形態にあわせた生い立ちを整理する方法の模索は必要になってくるだろう。ゆうりんでの実践が、もし、そのヒントの１つになれば幸いである。

最後になるが、自分の生い立ちを知らない子どもは、根っこのない木のようである。強風や大雨のような困難に倒れやすく、愛情や幸せという栄養を吸い上げる事が苦手である。そのため、未来という葉っぱや果実を実らすことが出来ない。生い立ちの整理をすることで強い根を張り巡らせて、現在に大きな幹を立てる。そして、将来に大きな希望という葉や実を実らせることが出来るように、日々の丁寧な関わりが子どものよりよい未来へと繋がると信じて、これからも実践を積み重ねていきたいと考えている。